ROSSI四季報

Research Organization of Social Sciences（立命館大学BKC社系研究機構）

Rits

2000年3月

第 8 号

CONTENTS

〈巻頭言〉社会システム研究　永尾　正章 ……1

立命館大学・中国社会科学院経済研究所 北京シンポジウム報告(3)　小野　進 ……2

サイバースペースにおける「仮想性」の意味　高木　彰 ……3

賃金制度の国際比較　浪江　巌 ……4

70000と200と30の差　三木　義一 ……5

「都市の色」　石見　利勝 ……6

「技術経営研究を通した一考察」　小松　史朗 ……7

中心市街地の再生のために、LRT（新型路面電車）の導入をはかろう　土居　靖範 ……8

産学官の連携による起業家とベンチャービジネスの育成について　黒木　正樹 ……9

新成年後見制度　濱田　盛一 ……10

少子・高齢社会における健康づくりと地域づくり －地域住民総参加型の運動機会の提供にむけて－　岡尾　惠市 ……11

「金融破綻のコストは誰が負担すべきか」　村山　嘉彦 ……12

日本の金融市場の実証分析　堀　敬一 ……13

巻頭言

立命館大学 社会システム研究所
所長 永尾　正章

社会システム研究

立命館大学社会システム研究所が発足してから、丸２年が経過した。理想は高く、しかし歩みは着実に、内外の関係者のご支援、ご協力に支えられて、基盤づくりを進めてきた。21世紀へ向けて、広い意味での社会システムを対象に、現実の社会システムとの連携も模索しつつ、できるだけ幅広い学問領域を糾合した研究の発展を志してきたが、来年度中にはいよいよ、その21世紀に突入する。

政治、経済、社会といった広い意味での社会システムは、それが人間の営みの場であることを反映し、矛盾することを同時に追求しなければならぬことが多い。したがって、たとえばその管理でも、効率を追求する集権と、多様性を尊重する分権の相反する要請を、同時に達成する難問に挑まねばならない。行きすぎればやがて修正されるという過程もたどりながら、時代環境とともに変化していかざるをえない。こうした社会システムの課題へ向け、新所長のもとで、多くの研究が花開くことを願っている。

通商産業省江崎産業政策局長（当時）による開設記念講演会の開催がまだ昨日のように思えるが、それ以後さまざまな展開がこの研究所を起点に進んできた。公募を通じた研究テーマの設定は一応の軌道に乗り、文理融合型の研究もある程度進められつつある。それらの途中経過や、関連した研究、あるいは研究成果そのものも、ディスカッション・ペーパーや、紀要、「ROSSI四季報」を通じて紹介されており、一般の出版物として刊行されているものもある。

社会との繋がりを重視する研究所としては、その活動に社会的な関心が次第に高まっていることを歓迎したい。公的資金や社会的資金の導入によって、BKC社系研究機構の中で研究センターとして運営される研究や諸活動も充実してきた。地域研究プロジェクトが地域の関心を呼びつつあり、サイバー・ディーリング・ルーム開設が話題を集めた。研究所としては、研究機構が量的にも質的にも発展していく起爆剤としての役割も重視してきた。

その意味では、関係者の絶大なご支援のもとで、研究所のプロジェクトから国際課税京都フォーラムが立ち上がってきたことも印象深い。同フォーラムのもとで、すでに２回にわたりシンポジウムを開催したが、海外からも含めて、産官学実（産業界・官界・学界・実務界）を網羅する多数の有職者の参加をえて、内容の充実した討議が行なわれた。第１回のその成果も、刊行して世に問うことができた。

関係者各位のご協力に、感謝したい。

（経営学部教授）